

<水稻の栽培ポイント>

7月中旬以降、気温・日照量とも平年より高く推移した事から必要茎数はおおむね確保され、普通植とちぎの星・あさひの夢の出穂は平年並と予想されます。

検査等級1等獲得と収量向上を目標に、適切な水管理や適期収穫など基本技術を徹底しましょう。

1 適切な水管理

- 引き続き、間断かん水を行います。特に、**出穂期～開花期**（出穂後30日）は最も水を必要とする時期なので水が不足しないようにこまめな間断かん水を行きましょう。（花水）
開花期を過ぎたら徐々にかん水間隔を延ばします。
- 出穂期～登熟期の異常高温時は胴割米や乳白米が発生しやすくなります。水温の下がる夕方から夜間のかん水を行って地温を下げ、根の活力維持を図りましょう。可能であればかけ流しも有効です。（水利条件に応じて実施してください。）
- 台風襲来時の強風や、台風通過後の乾燥した強風（フェーン）が予想される場合は、やや深水とし、脱水による乳白米の発生を予防しましょう。
- 落水時期は**出穂後30日以降**として、品質・食味の向上を図りましょう。（それまでは間断かん水で根の活性を維持する。）

2 出穂期以降のカメムシ対策

- 今年の発生量はやや少ないです。（一部の種類が多い。）天候次第では**増加する可能性**があります。
- 穂揃期に斑点米カメムシ類が水田内で見られる場合は、乳熟初期（出穂期7～10日後）までに殺虫剤を散布します。その後もカメムシ類が見られる場合、7～10日間隔で1～2回の追加散布を行きましょう。

3 雑草種子の混入について

- 昨年ライスセンターで荷受けした籾や玄米に、雑草種子の混入がありました。クサネム、ヒエが特に多く見られました。

☑ クサネム

容易に抜けるので、収穫前に手で抜き取りましょう。水路側から侵入することもあるので、水回りの際に注意しておきましょう。

☑ ヒエ

鎌などで除草してから収穫作業に入りましょう。また除草したヒエを畦や、圃場のすぐ脇などにまとめて放置しますと種子が落ちて来年以降また発生する原因になります。除草したヒエは、水稻圃場外に廃棄します。

多発生している圃場では、来年の除草剤や水管理を見直しましょう。

4 イネ縞葉枯病の対策

- 再生稲（ひこばえ）はイネ縞葉枯病を媒介するヒメトビウンカの生息地となり、個体数を増加させる上、発病株をヒメトビウンカが吸汁して保毒虫率を高める恐れがあります。収穫終了後は速やかに耕起（秋おこし）しましょう。
- イネ縞葉枯病抵抗性品種（とちぎの星、あさひの夢）の作付けも有効な対策です。

(裏面あり)

5 適期収穫を行いましょ

9月の気温は平年並～高い確率が40%、降水量については、平年並の確率が40%となる予報が出ています。今後も高温傾向が続いた場合、成熟期が例年より早まる可能性があります。

○収穫作業は、帯緑色粉率が10%になったら開始し、3%になるまでに終了しましょ。葉や枝梗は緑色でも、粉はすでに黄変して刈取適期を過ぎている場合がありますので注意しましょ。

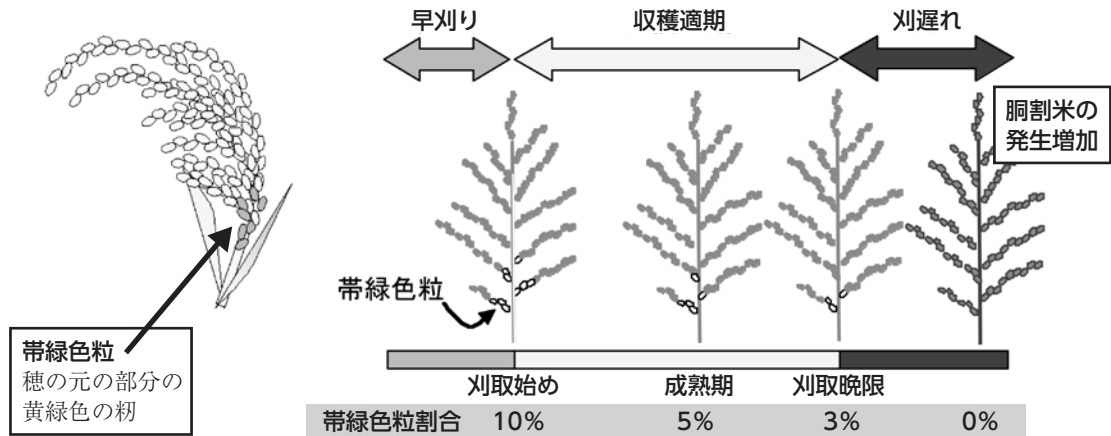
☑ 早刈りは青米が多く減収となります。

☑ 刈り遅れは胴割米発生、色沢の低下等により品質・食味が低下します。

【刈取適期の判定方法】

○平均的な生育をしている数ヶ所で5～6本の穂をまとめて握ってみます。

○穂全体に占める帯緑色粒の割合で判定してください。



6 適切な乾燥調整作業について

① 初水分と刈り取り時期

刈取り初水分は25%以下となつてからが適切です。適期を過ぎ、立毛状態で過乾燥になると胴割米発生の危険が高まります。

コンバイン各部の清掃をしっかりと行い、他品種や昨年の粉や麦の混入が無いようにして下さい。また、高水分刈り取り粉は長時間放置せず、速やかに乾燥機に投入し通風乾燥を行います。

② 乾燥温度

乾燥不足や過乾燥を防ぐため、必ず水分計を用いて水分測定を正しく行って下さい。乾燥ムラは、夾雑物が多くて乾燥機内の循環不良を部分的に起こした場合や、水分較差（高い水分の粉と低い水分の差）の大きい粉を混合した場合などに発生します。

胴割れや食味低下を防止するため、高水分粉の高温急激乾燥は絶対に行わないでください。

高水分粉の乾燥はまず通風乾燥を行い、その後35℃程度の低温からじっくり時間をかけて乾燥作業を行います。高水分粉の放置や急激な乾燥による品質低下がないように注意しましょ。

目標水分値 14.5%で乾燥調整を行いましょ。



9月～11月は「秋の農作業安全確認運動」の実施期間です。

コンバイン作業中にわらが詰まった際は、エンジン停止後に除去